



2009 平成21年

誌面に掲載した記事・写真等の無断複製・転載等はお断りします。お問い合わせ・ご意見は狛江市地域活性化課へ

発行 ● 狛江市地域活性化課
〒201-8585 狛江市和泉本町1-1-5
☎3430-1111 FAX3430-6870
Email=wacco@city.komae.lg.jp
編集・制作 ● 特定非営利活動法人 k-press
〒201-0012 狛江市中和泉3-2-16
プランツベルツ201
☎3430-6617 FAX3430-6743
Email=wacco@k-press.net

先端技術の開発・生産工場が次々建設

工業



狛江には、かつて先端技術の開発拠点や工場が次々と造られた。交通の便の良さ、豊富な水などの恵まれた立地条件を背景に昭和

10年代以降、工場や企業が進出、農地の中に近代的な工場が建設された。そのなかには、長時間の再生ができる音楽機器「フィルモン」をはじめ、無線通信機や航空計器など、当時の最先端の製品を造るハイテク企業も含まれていた。戦後になると、こうした企業はその高い技術を生かして、製品の開発・生産に取り組み、復興と高度経済成長を支える原動力となった。これらの企業は街の人の雇用の場となり、財政をうるおすなど、狛江の発展に貢献した。しかし、40年代になると、宅地化が進み、工場設備の拡張などが難しいなどの理由で企業の市外への移転が進み、跡地の多くが団地やマンションに姿を変えた。

東京航空計器全景

1968年ごろ



本社工場。手前が狛江通り。右下は狛江町役場(当時)



現社屋 2009年

よく売れたファックスや映写機

酒井晃さん(77歳・西野川)の話 昭和29年に入社し、生産部門で勉強し、営業を担当しました。当時の製品では、模写電送装置(ファックス)がよく売れました。他社より値段は高かったのですが、機械の性能や耐久性にすぐれていることで信頼が高かったのです。映写機や自動車の計器なども扱いました。28年ごろに航空計器の組み立て工場が建設され、屋上は米軍のヘリポートとして使っていました。そこで昼休みには社員がよく野球をやりました。営業から企画に異動し、55年に羽田のメンテナンスビルを完成させ、56年に企画部に異動したとき、市から狛江駅北口広場を造るため、第一小学校の移転先として用地を譲ってほしいと依頼されましたが、難しいのでお断りしました。しかし、再三依頼があり、本社建て直しのため住都公団に売った土地に一小が建設されました。

映写機 1947年ごろ



高かったのです。映写機や自動車の計器なども扱いました。28年ごろに航空計器の組み立て工場が建設され、屋上は米軍のヘリポートとして使っていました。そこで昼休みには社員がよく野球をやりました。営業から企画に異動し、55年に羽田のメンテナンスビルを完成させ、56年に企画部に異動したとき、市から狛江駅北口広場を造るため、第一小学校の移転先として用地を譲ってほしいと依頼されましたが、難しいのでお断りしました。しかし、再三依頼があり、本社建て直しのため住都公団に売った土地に一小が建設されました。



ヘリポート 1956年



工場 1953年

東京航空計器(株)

昭和12年に川崎市で創立、航空機の各種計器などを製造。16年に狛江工場建設、国内最大の航空計器メーカーとなる。20年に占領政策で航空関係機器の製造停止、狛江工場で民需品の製造を開始。21年狛江に本社を移転。27年に航空関係の製造を再開、以後各種の航空機用の機器の製造に加え、半導体などの精密機器の研究開発・製造を行っている。58年に現在の狛江本社工場完成。資本金5億円。本社・狛江市和泉本町。



クリスマス会 1953年



国際電気工場全景 1957年ごろ

周りには農地が広がっていた。手前の道が狛江通り

のんびりした自由な社風

藤岡昇さん(78歳・中和泉)の話 昭和28年に大学を卒業して国際電気株式会社に入社しました。会社は都営アパートの場所にあり、当時のサクラがいまも残っています。木造平屋建ての古い建物でしたが、そのころ既にタイムレコーダーでした。のんびりした自由な雰囲気、寮へ昼寝に行き帰ってこない社員を起こしに行ったこともあり。広い敷地の中には社宅や独身寮、食堂、浴場、診療所、床屋、運動場などもありました。私は技術職でしたが、入社早々、役員から1日で電波障害のある山間部でラジオが受信できる装置を作るよう命じ



運動会 1955年

統制で消えた画期的発明

細井栄さん(86歳・東和泉)の話 私の父(勇)は発明家で、レコード会社の技師長をしていた昭和4、5年ごろから共同で長時間レコードの研究開発をしていました。当時主流だったSPLレコードの約4分をはるかに上回る36分再生できる機械を発明し、「フィルモン」と名づけて11年に特許を取りました。12年に日本フィルモン株式会社を設立、現在の岩戸南2丁目に本社と



玄関

られました。設計図を持っていくと、次に試作品の制作を命じられるなど、とにかく実地体験で学ぶというやり方でした。通信関係の研究開発に取り組みましたが、新幹線の前の東海道線の特急「こだま」の公衆無線電話の開発がいちばん印象に残る仕事です。電波や通信関係の仕事を中心に急速に成長し、社員は入社当時450人ぐらいでしたが、35年には1,000人を超えました。37年に新工場を造りましたが、それでも追いつかず、41年に羽村に移転しました。私は労働組合の副委員長をしていたので、会社との交渉に追われました。狛江の敷地は都に売却されたのですが、引き渡しまで短期間だったので移転作業もたいへんでした。羽村は交通便が悪かったため、狛江から引越した人も多かったのですが、私は結婚して家を狛江に建てたので、片道約2時間かけて通勤しました。

1100人が働く狛江最大の工場

飯野芳男さん(83歳・和泉本町)の話 昭和16年に国際電気の前身の国際電気通信株式会社に入りました。狛江工場はその前年に119,000㎡を買収して建ったばかりで、主に対外無線機を作っていました。学徒動員の女子学生も多く、1,100人以上が働く狛江で最大の工場でした。工場には技術者を養成する青年学校があり、私もそこで働きながら勉強しました。広い敷地の中には畑があっ

工場を建てて、生産を始めました。地鎮祭には狛江村の有力者がたくさん招かれ、従業員の多くが狛江の人だったそうです。私たち家族は、事業が軌道に乗り始めた14年に成城から狛江へ越してきました。工場へも行きましたが、当時としては近代的で大きな建物の中にたくさんの機械が並んでいました。再生する機械だけでなく、浪花節や長唄、講談、ドラマなどを収録したベルト(音帯)も作っていました。別棟の録音所では原盤の録音をしましたが、当時の歌手や俳優など有名人がたくさん来たそうです。画期的な発明だったフィルモンですが、戦争が始まって統制が厳しくなり、15年にぜいたく品の製造販売を制限する規則ができて製造中止が命じられ、会社も解散してしまいました。



正門 1955年ごろ

国際電気(株)

昭和13年創立の国際電気通信(株)の自家用通信機工場が白江に建設、海外との交信用通信機器などを製造。23年の通信省(当時)の業務分割・移管により電元工業(株)となり、24年に独立し国際電気(株)創立。41年に敷地を東京都に売却、羽村町に工場を移転。通信を中心とした精密機器の研究開発と製造を主力とし、南極観測船宗谷の通信機器なども担当した。平成12年に合併により(株)日立国際電気となり、通信・情報システム、放送・映像システム、半導体製造装置を手がけている。資本金100億5800万円。本社・千代田区外神田。

野菜を作っていました。戦後の23年に会社の業務が分割され、郵政省と電元工業株式会社に移管しました。国際電気になったのは24年です。戦後は、通信機のほかにも、電波関係の技術を生かした製品の開発に取り組むことになりました。私も、電波で養蚕のサナギを殺す「殺蟄機」の開発に携わりましたが、養蚕が盛んだった群馬県へ度々出かけて、徹夜で機械の据え付けをしたことを覚えています。



日本フィルモン工場

父は政治家の演説を収録したベルトを出すなどフィルモンの存続に努力したようですが、結局かたがたありませんでした。戦後も復活を試みましたが、テープレコーダーやLPレコードが既にあり、断念しました。

写真提供・取材協力=酒井晃、藤岡昇、飯野芳男、細井栄、東京航空計器株式会社、日立国際電気株式会社、株式会社菅原研究所(順不同・敬称略) 資料=「狛江市史」(狛江市)、「国際電気五十年史」(国際電気)